啓蒙の弁証法　哲学的断層

ホルクハイマー、アドルノ著　徳永恂訳

　　　2007 1/16 岩波書店　　　　　　　　　　　　　報告　松本倫明

著者紹介

マックス・ホルクハイマー

* ドイツの哲学者、社会学者
* 『理性の腐敗』
* 『権威と家族』
* 『哲学の社会学的機能』

テオドール・アドルノ

* ドイツの社会学者、哲学者、作曲家
* 『プリズム——文化批判と社会』

~序文~

啓蒙とは

本書では、特に定義づけされていないが、啓蒙の一般的意味を明確にしておくことは本書の理解の一助となる。

啓蒙とは「広い視野に立って合理的な判断ができるように導くこと」[[1]](#footnote-1)である。この啓蒙は近現代思想に大きく影響を与える。

啓蒙の退行(=非合理の進歩)

|  |
| --- |
| 何故に人類は、真に人間的な状態に踏み入っていく代りに、一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでいくのか(P7) |

思想は、時代精神の習性や方向とは分離するべきである。それは実証主義が学問を不要としたり、市民的文明が崩壊し、学問の意義自体が疑われたりする中、啓蒙が退行しているからである。つまり思想は益々、非合理的になる。

進歩には破壊的側面がつきものである。然し啓蒙の退化により、思想は矛盾の止揚という本性を失い、真理への関わりさえも失ってしまう。これが専制主義への服従や民族主義等の、理論的秩序の薄弱さを生み出している。

1. ベネッセ表現読解国語辞典(2004)沖森卓也・中村幸弘編著 [↑](#footnote-ref-1)